

関西では、朝夕は冷えますが、昼間は暑い日が続き、あじさいのつぼみが見られるようになってきました。

現在会員登録数 4,237 人さま。次号は 6 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■  
【1】お知らせ

● 英語圏児童文学会 西日本支部 夏の講演会

「イギリスで始まった絵本の仕事 絵本作家 きたむらさとしさん」

日時：6月29日（土）14：00～16：00 ※申込期限：6月26日（水）

会場：大阪府立中央図書館 多目的室 定員：60人 参加費：一般1000円

※後日、動画配信あり。動画配信のみの申し込みも可。

主催：英語圏児童文学会 西日本支部 （IICLO 共催）

詳細・お申し込みは↓

Peatix <https://lecture2024-jsclewest.peatix.com>

● 40周年記念フォーラム「童話を語る・絵本を描く－童話・絵本のつくり手を目指すみなさんへ－」

「第40回 日産 童話と絵本のグランプリ」の表彰式（3月9日）で開催した、本グランプリ審査員による、40周年記念フォーラムを当財団 YouTube 公式チャンネルで無料公開しています。ぜひご覧ください。 詳細は↓

[http://www.iiclo.or.jp/07\\_com-con/02\\_nissan/index.html#40forum](http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#40forum)

[YouTube] <https://youtu.be/siMJpFcPydY>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → [http://www.iiclo.or.jp/donation\\_10th.html](http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html)

※Syncable（シンカブル）＝クレジットカードでご寄付いただけます。

継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube 版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll96>

※公開内容一覧は → [http://www.iiclo.or.jp/ml\\_youtube/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html)

【 2 】 コ ラ ム

\*\*\*\*\*

《 1 》 この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

\*\*\*\*\*

『再会の日に』 中山聖子/作 藤井紗和/装丁画 岩崎書店 2024年4月  
対象年齢：小学校高学年以上

\* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん (T) です。

あらすじ：小学6年生の陽架 (はるか) は、母と二人暮らし。近くには、母の妹で漫画家の真尋 (まひろ) ちゃんがいる。母は陽架と未怜 (みれい) 姉妹を連れて4年前に父の家を突然出た。しばらくは3人で暮らしていたが、姉妹だけで外に出たときに、未怜が父方の祖母とおばに連れ去られ、未怜はそのまま父の家で暮らすことになる。4年後、陽架は級友から未怜をある塾で見かけたと言われ、一人で会いに行き、入院している真尋ちゃんのお見舞いにいっしょに行ってほしいという。

T：離婚家庭を描いた児童文学作品は数多くありますが、別れて暮らすきょうだいを描いた作品はこれまであまりなかったように思います。

Y：『地図を広げて』(岩瀬成子/作 偕成社 2018年6月)があり、きょうだい再会したところから始まってその後の生活が描かれています。一方、この作品は、再会するまでが描かれています。

T：タイトルにもある「再会」がとても印象的な作品です。小学6年生の陽架と4年生の未怜は、4年ぶりに出会うことになります。陽架は、未怜が祖母たちに連れて行かれたとき、妹の手を放してしまい、自分は逃げてしまったことを後悔し続けていて、それ以来、想像の中で未怜を成長させます。けれど、出会った未怜は、想像とはまったく違っていました。

Y：そこの、ぎこちないというか、かみ合わない会話がとても心に残って「うまいなあ」と思いました。お互い、心の中に抱えていることがいっぱいあって、でも、それを言葉にせず、真尋ちゃんのお見舞いへ行くために、会話をします。文字面の会話の背後にあるそれぞれのひりひりした思いが伝わってきました。

T：このときのかみ合わない会話から、陽架は妹の他者性を意識し、別の自立した人間だと気づきます。それぞれが別の生活を積み上げてきたことによって、きょうだいだからといって、同じ土俵では語り合えない、分かり合えないということが伝わってきました。そして、そのことが、未怜が駅で困っているおばあさんを助けたりするなど、具体的なエピソードの中にしっかりと描かれています。

Y：陽架のお母さんは、自分が作った夕食に点数をつけるような夫が耐えられなくて、子どもを連れて突然家を出て、未怜が連れ去られてからは精神的にかなり不安定になります。

そういうお母さんが、植物公園で働き、少しずつ変化してきているのを見て、真尋ちゃんが陽架に、「大きらいだったときもある」けれど、今は「お姉ちゃんのやさしいところ、わたしにもわかってきたし。それに人って変わっていくし。お姉ちゃんも、わたしもね」と言います。大人も変化するという点に共感しました。

T：冒頭と最後に、洗濯物の柔軟剤の香りの話がでてきて、陽架も未怜も母親を嗅覚で認識していたり、陽架も未怜も横断歩道の白線だけを飛ぶように

踏んで歩き、それが、幼い頃、白線以外は海だと思って、海に落ちないようにしていたことの名残だったりするところに、言葉では表現されていない家族の結びつきを感じました。

\*\*\*\*\*

## 《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

### 第105回「柳沢」

臨場感のある会話や独白を描く

「柳沢」は、「初期短編綴」と称される作品の一つで、清書稿第一葉の題名下に「大正六年十月」、本文末尾に「1920.9-」の日付が記入されています（『宮沢賢治コレクション3』の「本文について」参照）。大正六年十月、盛岡高等農林の三年（二一歳）であった賢治は、弟（中学一年）や従弟二人を連れて登山に出かけており、そのときの体験が元になっているとされています。柳沢は、岩手山へ向かう登山口の一つでした。未明に出発するため、一行は前夜の柳沢に到着、投宿します。

〈こんや、二時まで泊めて下さい。四人です。たいまつがありますか。わらじがありますか。それから何かよるのたべものがありますか。〉（中略）

〈さあ、二時までぐっすりやるんだぜ。ねむらないとあしたつかれるぞ。はてな、となりへ誰か来ているな。そうだ、土間に測量の器械なんかが置いてあった。〉

四人は、社務所の向かいにできた、ランプが黄いろに点った宿にやってきます。そのとき社務所はもう戸を閉めていることから、日が落ちていたのでしょう。早朝登山に備え、一行は少し仮眠しようとしています。

うとうとし始めたころ、〈誰かどしどし梯子をふんで〉隣の部屋にやってきます。先客は役人（皇室林野局の人たち）で、山歩きの案内人に密造の葡萄酒をすすめられたり、翌日の騎兵による実弾射撃のことを話したりしています。

やや寝過ごして、目を覚ますと夜中の二時半。寒さでガタガタするなか、たいまつをもって出発します。オリオンが高くのぼり、山頂には初雪が白光りし、四人は開経偈を唱和しながら進んでいきます。が、途中で山路に迷い、雨に降られてしかたなく宿へ引き返します。宿で服を乾かしていると空が明るくなりはじめ、一行は再び出発します。

〈首に鬱金を巻きつけた旭川の兵隊上がり〉とされる案内人と役人の会話、また話者の心内を語る独白が特徴的です。話者の側に立ちながら、その場に居合わせているかのような臨場感は、「 」や（ ）で会話や独白が繰り返される文体によるものだと思います。

ところで、一行は暁に、再び霊峰・岩手山をめざします。話者の言うことを聞かず、思わず駆け出してしまう三人の前には、立派な風景〈新しく置かれたみねの雪。赤々燃える谷のいろ。黄葉をふるわす白樺の木。苔瑠璃。〉が広がります。そして、〈琥珀の波〉のような日の光を浴びながら駆けていく姿には、若さゆえの清々しさとともに、それをこの上ない新鮮な喜びとする話者の視線を感じます。（ペ吉）

（本文の引用は、宮沢賢治コレクション3『よだかの星』によりました。）

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 59

\*\*\*\*\*

トントンパットン  
トンパットン  
まだ バスは きません

(『バスにのって』 荒井良二/作 偕成社 1992年5月)

刈谷市美術館での「new born 荒井良二 いつも 知らないところへ たびするきぶんだった」展の中に、『バスにのって』の原画があり、とても懐かしくなりました。「ぼく」がバスに乗って遠くへ行くために、ラジオを聞きながらバス停でバスを待っており、いろんな人がバス停の前を通り過ぎ、夜を過ごし、やっとバスが来たにもかかわらず、バスは満員で乗れず、最後は、バスに乗るのをやめて、歩いて遠くへ行くことにするというストーリーです。

1992年に出版されたとき、「新しい絵本が出た！」と強い衝撃を受けたことを覚えています。著者には既に『ユックリとジョジョニ』(ほるぷ出版 1991年3月)があり、『バスにのって』もその流れをくむといえそうですが、私にとっては、より「新しさ」を感じる絵本でした。

その新しさの第一は、何とんでも、主人公の「ぼく」が家に帰るのではなく、旅を続けるという展開でした。私には、絵本は「行きて帰りし物語」(瀬田貞二『幼い子の文学』中央公論社 1980年1月)という勝手なイメージがありましたが、それを覆すものでした。『バスにのって』を知った後、佐々木マキ「ねむいねむいねずみ」シリーズ(PHP研究所 1979年6月～)でも既に旅を続ける主人公がいることを知りますが、この絵本に出会ったときには、とても新鮮に感じました。

それから、無国籍な空間、ベケットの戯曲「ゴドーを待ちながら」を思わせるような待ち続ける主人公、その主人公が長い間待った後、歩くという選択をすること、つまり、文明の利器を使わず、時間をかけて自分の足で旅をすること、作品全体から音楽が聞こえてくること、「トントンパットン トンパットン」という絵柄にあった、カラフルでリズムカルな音の反復、道と地平線のイメージの繰り返し、バス停を通り過ぎていく人やモノたちが読者に迫ってくるように感じられる構図のおもしろさ、黄色や赤など色遣い、表紙のタイトル文字が喚起するイメージなど、そのとき感じた新しさは山ほどありました。

そして、この作品にある「終わらない旅」「音楽」「歩く」「孤独」「出会い」などのモチーフは、今の荒井作品につながっているなど思いました。(Y)

\*\*\*\*\*

《4》行って来ました！

\*\*\*\*\*

刈谷市美術館で6月15日まで開催されている「new born 荒井良二 いつも 知らないところへ たびするきぶんだった」展に行ってきました。1階には、「絵本『ぼくはこんな絵本を作ってきたんだ』と、最後に見てほしいと書かれていた、日々夜に描いている模写などを、2階には、山形ピエンナーレなどの立体作品や、新作の立体インスタレーション《new born 旅する名前のない家たちを ぼくたちは古いバケツを持って追いかけ湧く水を汲み出す》が展示されていました。

一言で言えば、荒井良二の世界に圧倒され、同時に神秘的な印象を抱きました。1階の、「絵本『ぼくはこんな絵本を作ってきたんだ』」の部屋には、『あさになったのでまどをあけますよ』や『きょうはそらにまるいつき』（ともに偕成社）や『ゆきのげきじょう』（小学館）などの絵本原画だけでなく、『Hanako』のイラストや伊勢丹の広告などもありました。また、展示室の真ん中には、ベニヤ板で作られたやぐらのようなものが建てられていて、そこにも、絵本原画や小さなイラスト、緻密な展示の構想メモなどが隙間なく展示されていました。

2階にも、部屋の真ん中に立体作品がありました。一番大きなものは、まるで、おまつりの屋台のようにも、雑貨屋さんのようにも見える山形ビエンナーレ 2018 で出展された『山のヨーナ』の作品群がありました。こけしも、「山の神さまちゃん」という土偶たちも、絵も文字も一体となって荒井ワールドが創られていました。

立体のインスタレーション《new born 旅する名前のない家たちを ぼくたちは古いバケツを持って追いかけて湧く水を汲み出す》は、おもちゃの引き車のような子どもの家がたくさん床に置かれていて、昭和時代と思われる古いモノクロ写真も数多く貼られており、まるで、部屋自体が絵本のように感じられました。これらはセキスイハウスの廃材を使って創られています。この車の一つ選んで物語を考えるとというワークショップも紹介されていて、過去の記憶をくみ出しながら、数限りない新しい物語が生まれていくというイメージを抱きました。

すべての展示を見終わって、月や太陽のイメージ、楽器を弾いている人のイメージが強く心に残り、自然と芸術と自由への愛を感じた展示だったなどと改めて思いました。(K)

刈谷市美術館 <https://www.city.kariya.lg.jp/museum/>

\*\*\*\*\*

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第10回

\*\*\*\*\*

第4章 宮川ひろ

その1 「地図のある手紙」、『春駒のうた』

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまんきみこさんのことを書きました。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書きましたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969年）のころまでを述べています。

第4章では、宮川ひろ(1923～2018年)のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返ります。母もまた、私の出会った児童文学者にほかなりませんでした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/watashinodeatta.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html)

---

### 【3】全国のイベント紹介

---

#### ● 第16回アジア児童文学大会

大会テーマ：平和を希求するアジア児童文学

開催日：8月24日（土）、25日（日） ※ 有料、要申し込み

会場：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

---

### 【4】プレゼント

---

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『再会の日に』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/1GzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は6月10日（月）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

近ごろの天気予報では「例年通り」や「例年並みと」のような表現をあまり聞かなくなりました。今月は、爽やかな五月晴れが定番ながら、台風並みの強風や落雷、雹（ひょう）に注意との予報もあります。五月晴れの日には、太陽の光を浴び、風を感じに外へ出たいと思います。(TA)

---

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html)

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

---

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

---